Sanborn, R.W., J.C. Fankhauser, G.B. Foote, C.A. Knight, G.J. Biter, T.J. Kelly, R.E. Reinhart, M.E. Solak, P.W. Summer, and C.G. Wade, 1976: Hail declaration procedures and seeding operations, Final Rept. Natl. Hail Res. Exp. Randomized seeding experiment, 1972-74, **III**, NCAR, 207 pp.

Strauch, R.G. and F.H. Merrem, 1976: Structure of an evolving hailstorm, Part III: Internal structure from doppler radar, Mon. Wea. Rev., **104**, 588-595.

Sulakvelidze, G.K., N. Sh. Bibilashvili, V.F. Lapcheva, 1967: Formatio of precipitation and modification of hail process, (English translation) IPST, 207 pp.

———, B.J. Kiziriya, and V.V. Tsykunov, 1974: Progress of hail suppression work in the USSR., Weather and climate modification, ed. W.N. Hess, John Wiley & Sons, 410-431.

田中豊顕，1970：ソ連における雲物理の研究状況，天気，**17**，526-538，

Thomas, W.A., ed.: 1977: Legal and scientific uncertainties of weather modification, Duke Univ. Press, Durham, N.C., 155 pp.

Vento, D., 1972: La determinazion della energia di impotto della grandine, Rev. Ital. Geophis., **21**, 73-77.

———, and G.M. Morgan, Jr., 1976: Statistical evaluation of energy imparted to hail by wind in Europe and United States, Second WMO Sci. Conf. Wea. Mod., Boulder, WMO, No. 443, 281-285.

WMAB, 1978: The management of weather resources, **I**: Proposal for a national policy and program, Report to the Secretary of Commerce, Weather Modification Advisory Bord, 299 pp.

Young, K.C., 1977: A numerical examination of some hail suppression concepts, Met. Monogra. No. 38, 195-214.

宮沢清治著

天気図と気象の本

国際地学協会発行，1978，A5版，127頁，650円

天気図とか気象の本は，地球科学の分野としては昔からポピュラーな本として数多く出版されてきた．それにもかかわらず，多くの社会人の要望に答える適切な本は，残念ながらあまり見当たらなかった．それは，幅広く，わかりやすく，ざん新で，しかも深い本質を盛ったものでなければならないからである．

その点，この本は三つの点で心より推薦できる．第1は構成の見事さである．第1章に気象の基礎として，大気，身近な観測，気象の観測体制，第2章に天気図として，天気図の書き方と読み方，四季の天気図，第3章に気象と生活として，日本の気候，気象災害，気象とレジャー，生物季節，気象と健康，気象と交通，異常気象が掲載されている．また，付Ⅰに日本の主な気象記録，付Ⅱに外国の主な気象記録，付Ⅲに天気のことわざが付加されている．これだけの幅は他に類例があまりない．

第2として，著者の人間と経験がしみ出てくる点である．およそ良き著述は表面的な表現力の良否できまるものでなく，その人の人間性が陰に陽に表われてくるものでないと人に対して説得力がない．著者は長く予報技術にタッチしたベテラン予報官であり，とくに降雪の研究としてはエクスパートである．また，気象庁の天気相談長所，災害・国会担当の主任予報官として社会との第1線の接触者として苦斗された．その経験からまた著者自身の人格からしみ出た著述には，気象学の本質と応用の調和が深く感ぜられる．とくに第3章の着眼点に敬服する．

第3に，手軽さの点も見逃がせない．いくら良い本でも部厚なものは敬遠される．簡潔にしかも内容を落とさないこと，これも著者の経験からまとめられたものと思われる．図表も多く，見やすく，きれいである．

現在のように本や雑誌の洪水の中で，この種の本の良き普及を願っている．

（内田英治）